

10月に「ヴォーレ」で日本におけるソロ・デビューを果たしたイタリアン・ピアニスト・ステファノ・ボラーニの同年代2作が最も充実した。「黒と褐色の虹」と題されたこのアルバム、実は「ヴォーレ」と同日同月にメンバーでレコーディングされたもので、本来「オーストラリア」は2002年7月18日にロマのスタジオ・フォルム2で2分間の試音込みで終わらせたというわけである。このような形のレコーディングは取り立てて珍しいものではない、しかし通常で発売することは、やはり異例だといえるだろう。通常なら半年なり1年なり、期間を開けてリリースするものだからだ。また日本ではまだまだ無名な存在のアーティストを紹介するのであれば、これはほとんど勝手にプロモーション活動、との思いが働くのかもしれない。ところがヴィーナスレコードのオーナー/プロデューサー、藤原氏は自身の連続発売という意で、ステファノ・ボラーニの前身を築いた日比野の間に遭遇せよなどと考へた。そういえば、ヴィーナスはつい先日、ステイヴ・キューンとの新作でユニークなアイデアを打ち出したばかりだ。ベネチスがある2つのトリオで、同じ音楽素材に同じレコーディング・セッションを行った。というのも、しかも2枚同時発売である。ヴィーナスでは女性音楽をあらたにジャズかつ・ポップ風多岐で、国策による文字をあらたにデザインも異色と謳うべきものだった。

本アルバムは主人公であるステファノ・ボラーニは、人材ひしめくイタリアン・ピニストにあって、急進に台頭してきた奇才の1人である。1972年7月12日イタリア、ミラノ生まれ、1歳でドイツに入り、1980年移住して来した。フィレンツェのルビエ・シニエ楽院を卒業後、イタリアン・ポップの世界で活躍をはじめながら、ジャズ・ピアニストとしても活動。フィル・ワズ、グレッグ・オズボーン、パボ・ロ、レス、リチャード・マリアーノ、ハン・ベントン、パット・メセニー、ケニー・シラーズ、ラズ・ウォル・ラッド、エリオット・ジャクソン、トニー・パーキンス、ニコニー・オルタ等と共演。参加アルバムは30作を超える。88年にはイタリアを代表するジャズ専科誌「Musica Jazz」の「ニュー・ジャンル」賞を、2000年にはイタリアの「ジアンツァ」賞を獲得した。ジャズ、クラシック、エレクトロニック/ポップ・ミュージックの両領域を、守衛範囲の広い音楽家はボラーニの代役格を兼ねては居るに違いないかもしれない。以下にボラーニのリーダー作を挙げておこう。

- 1.MAMBO ITALIANO / STEFANO BOLLANI-ARES TAVOLAZZI (Philology)
2. L'ORCHESTRA DEL TAITANIC (Via Veneto Jazz) 1999
3. Rava Plays Rava / Enrico Rava-Stefano Bollani (Philology)
4. ABBASSA LA TUA RADIO (In Edicola) 2000
5. HOMMAGE TO BILL EVANS AND JIM HALL / LUIGI TESSAROLLO-STEFANO BOLLANI (Soul Note)
6. IL CIELO DA QUAGGIU (VJ) 2001
7. LES FLEURS BLEUES (Label Bleu) 2001
8. MONTREAL (Diary) / RAVA-BOLLANI (Label Bleu) 2001
9. VOLTARE (Venus Records) 2002
10. BLACK AND TAN FANTASY (Venus Records) 2002 (=本アルバム)

これらのうち、2とトリオにフォー、フォーティン、ヴォーカルが加わった編成で、ボラーニの音楽性を多角的に築きあげる。8は同じメンバーによる続編。同名のフレンチ・ノベルからタイトルを拝借したこの曲、ボラーニオリジナルが中のソロ&トリオ作。優れたピアノ・テクニックと音楽的センスの両面をさらした秀作であり、カリカ

Black And Tan Fantasy
黒と褐色の虹
Stefano Bollani Trio
ステファノ・ボラーニ・トリオ

1. ジャズト・ワン・オブ・ノー・シングス シンクス
Just One Of Those Things (Porter) (3 : 48)
2. 黒と褐色の虹
Black And Tan Fantasy (Elliott-Miley) (4 : 32)
3. 白昼夢
Day Dream (Grove) (3 : 31)
4. 恋の終わりに
I'm Thru With Love (Kahn-Mainek-Burke) (5 : 07)
5. イッツ・オール・ユーズ・ア・ユ
It's Always You (Van Heusen - Livingston) (5 : 50)
6. イッツ・ユー・オー・ノー・フ
It's You Or No One (Kahn) (5 : 38)
7. 黒夜の夜
La Ultima Noche (Collazo) (4 : 38)
8. フラワー・イズ・ア・ソフタ・シンク
Flower Is A Loversome Thing (B. Strayhorn) (5 : 35)
9. ヴァンパイア・キッド・デッド・フェイス
The Sophisticated Lady (D. Ellington-Parry - Mills) (6 : 19)

ステファノ・ボラーニ・Stefano Bollani (piano)
アレス・タヴォラZZI Ares Tavolazzi (bass)
ウォルター・パヴリ Walter Pavli (drums)

録音：2002年7月、8日 ローマ

Produced by Tetsuo Hara.
Recorded at House Recording Studio in Rome on July 7 and 8, 2002.
Engineered by Simone Caimmuglioli and David Almaraz.
Mixed and Mastered by Venus 24hd Hopy Magnus Sound.
Shuji Kihama and Tetsuo Hara.
Front Cover: Roberto Altomare
Art Management: Mario Guddi. Designed by Taz

ジャズ・マガジン「ダグナン・ビート」では四回連続だった。8はこのこととボラーニが共演する機会のみでペラペラのイタリアン・ドラムペラー・エンジョ・ラバのデュオで、2001年の「メントロ・トリオ・ジャズ・フェスティバル」におけるラバ、ラバのオリジナルを中心に、2人のソロ・デュオ・アルバムがそれぞれ発表されている。Label Bleuのファンにお馴染みの写真家ギョ・クレググの撮影したこのアルバムは、両方ともにオリジナル・アートワークも素晴らしい。今年、日本で発売されたボラーニの参加作が2曲ある。1はヴィーナスレコードの原盤制作であるエンジョ・ラバ・カルテットの「ルネサンス」だ。ラバが最大の影響を受けたマイルス・デイヴィスとチェット・ベイカーのバトリで構成したトリビュート作。メンバーは、ラバ、ボラーニ、ロザリオ・ボナルコリ(ト)、ロベルト・グロ(d)といはれたい新イタリアンで、おそもこのアルバムで最年少。ディアーノ・スツックホフム、イマ・イヴァン・ウレランティン等、おもしろトリオで各自に準備しないといわれるナンバーに取り組んでいるが、編法自体、もう1枚はジョヴァンニ・トーマゾ(p)とラバのダブル・リーダー作「デル・ウー・ヴォー、ヴォー・イン・ザ・ムービーズ」(CAM Jazz)だ。「モア」や「女傭り」等の映画音楽を収録。オールドスクール4ビートよりも、商業的オリジナルなメロディを重視した点の聴きどころとなる。

イタリアン・ソングを集めた前作「ヴォーレ」に対し、今回登場する本アルバム「黒と褐色の虹」は、アメリカ人の作曲家であるスタンダード・ナンバーを中心に構成されているのが特徴色。とりわけデューク・エリントン、ビル・ストレイホーンとのデュオを4曲演奏している間に、ボラーニのバックグラウンドがうかがえる。ベンシンのアレク・タヴォラZZIはボラーニとエンジョ・ラバ、ジャン・バットと共演した「FLASHBACK」(2001年、Philology)に参加。ドラマのウォルター・パヴリは、先日よりスタートアップしたボラーニのリーダー作の中で、2.6に参加している。現在イタリアではこのメンバー

でステファノ・ボラーニ・トリオは活動している。

ジャズト・ワン・オブ・ノー・シングス
黒と褐色の虹
Black And Tan Fantasy
黒と褐色の虹
Stefano Bollani Trio
ステファノ・ボラーニ・トリオ

- 1曲目のオリジナル・ナンバー。最初のパースの1音が、この曲のムードを決定しているといっても過言ではない。途中でヴィーナスのまれベニス・ソロを聴いてもわかるように、イタリアのドラムラッジョ・ジャズの最大な特徴を継承していることをここで証明。
- 1940年に発表されたビル・ストレイホーンとのナンバー。ビリーのテーマ・ストロメンは比較的シンプル。しかし3分1秒という短い時間短縮パースにスポーツライクな道をたてあたりは、ボラーニのメッシージのかもしれない。ロング・ヴァージョンでも聴きはじめだ。
- 恋の終わりに
1931年にビルドワード・ペイリーが歌ったナンバー。スイングにメロディを関連するボラーニの演奏がそのぶる力がある。楽曲の美点を浮き彫りにした上で、自身のオリジナル性も表現している点も素晴らしい。
- イッツ・ユー・オール・ユーズ・ユー
フランク・シナトラ、チェット・ベイカーらボラール・ヴァージョンがけいたの曲を、ビッパ・トリオで開いたセンシティブである。41年のヒュー・ドゥーソン・オーヴァージョントはとはい、これは確かな曲。そしてたまたまベニス・ソロをフィーチャー、トリオとしての強さを前面に出している点に、好感を抱く。
- イッツ・ユー・オール・ユーズ・ユー
テーマ・メロディを表現するために、様々なアンダルから導き出されたに注している。またアバウ・テンでアバウと響きあがる場面も、自分自身が聴いて。ベニス・ソロで、ドラムスとの小規模交換を経て、新しいメロディが生みだされ昇華して変形。もしもオリジナル/ピアノ・バージョンだったら、さらさら新しい風景が期待できるかも、と勝手に。彼らの生演奏を見た気が一番高まっている。
- 黒夜の夜
これはラテン・アメリカからの一品。日本では「有馬権とノーチエ・グリア」の演奏が知られている。曲調もラテン風のメロディである。コンディショもピリリと決まっている。ピアノ強を強調した上で、オボエ・ブラス・ジャズ、イタリアのドラムも豪華にもっとの工夫を加えたものに思われる。
- フラワー・イズ・ア・ソフタ・シンク
テーマにおけるテンションの高いサウンド。息を凝らさないボラーニのプレイは、まるでシーツ・オブ・サウンズ。1つ耳を通せば、このようにこの曲のフォルムで取替えて、トニー・ウィリアムス「シスター・シエリル」と同じリズム・パターンごとで使用されていることだ。
- ソフィスティケイテッド・レディ
過剰、リズムを強調しだすソロ・テリで演奏されること多いこの曲を、異なるアプローチで演奏している。他の曲で聞かれることが、ボラーニはそもそも過去の様々なヴァージョンを踏まえたと、自分らしいオリジナル性を表わしよと考へている。この部分にボラーニの今後の可能性がうかがえるといえる。